

日本オマーン・クラブ・公開講演会
2018年5月31日(木)

イスラームを学ぼう 世界を読み解くために

東京国際大学特命教授
東京国際大学国際交流研究所長
筑波大学名誉教授
塩尻和子

- 1、イスラームのイメージ
- 2、一神教と多神教
- 3、イスラームの基本的教義
- 4、イスラーム社会の特色
- 5、歴史上の相克と共存
- 6、イスラーム文明の特色
- 7、宗教戦争とはなにか？
- 8、「共存」の意味とは？
- 9、現代のイスラーム
- 10、仏教者の対話努力
- 11、差異を乗り越えること

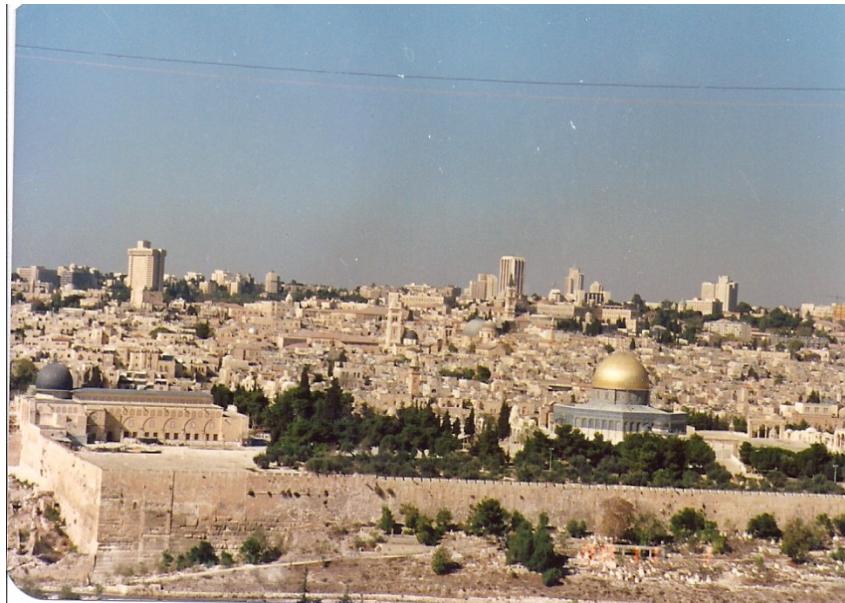
1、イスラームのイメージ

- ・唯一神に絶対服従 → 神・仏への絶対帰依、すべての宗教に共通する教義、イスラームだけが厳格ではない。
- ・4人妻の教えや女性差別 → 4人妻は歴史的な事情による教義だが、現在ではほとんどが一夫一妻。憲法で多妻禁止の国も。
- ・世界史上最初に「妻に相続権」を認めたのは、イスラーム。
- ・女性差別は、現在でも宗教や社会制度を問わず世界中で見られる。(日本女性の社会進出度は、2017年度、世界で114位)



2、一神教と多神教……重なり合う神観念

- ・多神教：寛容で包容力があり、人間的で優しいか？
日本のように自然が豊かで温暖な気候の地域に発生するのか？
- ・一神教：唯一の神しか容認しないので、厳格で不寛容なのか？
砂漠地域のように厳しい自然環境の中で発生するのか？
- ・一神教が発生した中東地域にも緑豊かな自然はある。中東地域はもともと多神教・偶像崇拜。自然環境が厳しいインドでも多神教（仏教・ヒンドゥー教）が発生。
- ・多神教のローマ時代も、戦前の日本も、「戦争」を興してきた歴史がある。
- ・多神教（神社の神、交替神教など）にも一神教・偶像否定の要素がある。
- ・一神教（聖者崇敬、聖遺物崇敬など）にも多神教・偶像崇拜の要素がある。



3. イスラームの基本的教義(1)

- ・西暦610年に発祥、ユダヤ教、キリスト教と同じ伝統上の一神教
- ・1922年オスマン帝国が滅亡するまで世界の中心となった宗教
- ・中東から中央アジア、東南アジア、アフリカ、東欧まで広がった。
- ・現在の信者数、推定16億人、信者数は増加傾向にある。
- ・基本的な信条を守れば、地域の独自性を生かした土着化が認められた。
- ・ユダヤ教、キリスト教と同じ聖書を共有する宗教として「啓典の民」
- ・他民族や諸文化の融合を図り、すたれていたギリシア科学を取り入れて、近代科学の基礎を築いた。

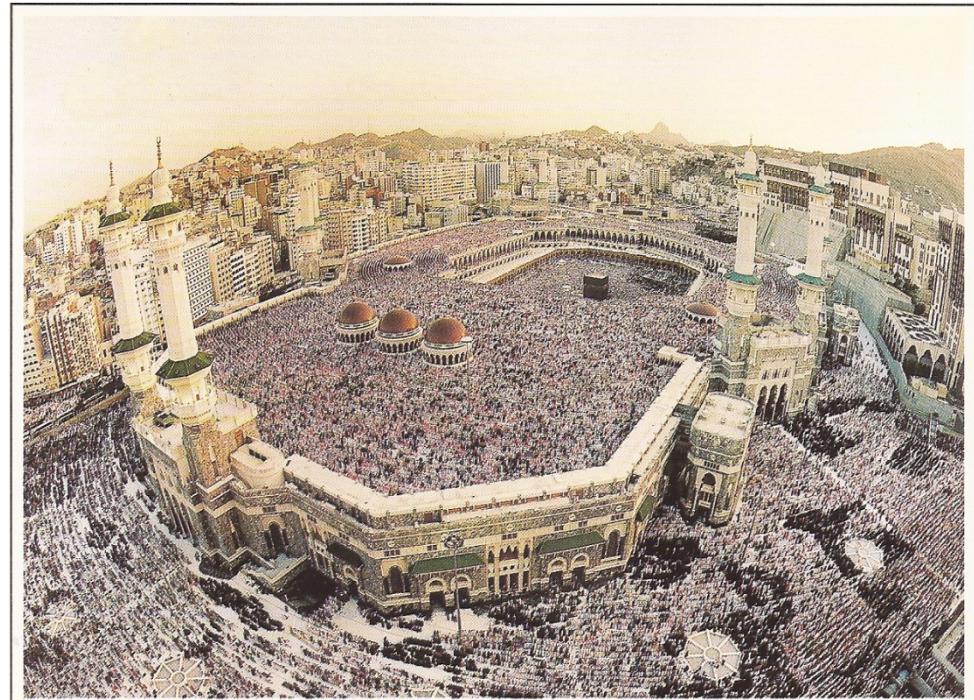
イスラームの基本的信条

六信：その存在を信じるもの

　神、天使、聖典、預言者、
　来世、予定(定命)

五行：義務の宗教儀礼

　信仰告白、礼拝、喜捨、断食、
　巡礼(そこへ旅する能力のある者に課せられる)



6. イスラーム文明の特色(2)

- ・融合文明の一例『千夜一夜物語』
- ・大衆文学であるが、イスラーム世界の繁栄と生活文化を記述している。アラブ世界発祥の物語ではないが、長い期間をかけて追記されたものであり、実在のカリフや人物の氏名やエピソードも掲載されているために、アッバース朝の最盛期の世界を描いていると考えられよう
- ・『千夜一夜物語』は職業的語り手によってコーヒーhausなどで口演されていたらしい。反道徳的な筋書きや性的表現も含まれるが、中世アラブ社会の民衆の姿を再構する一級の史料である。
- ・「コーヒーの普及」：エチオピア高原原産のコーヒー豆はカフェインの効果によって眠気を取るために、15世紀の初頭にスufi教団（神秘主義の修行をする教団）で、夜間の修行を補助する飲料として使用されはじめ、13世紀に入ってからコーヒー豆が炒られるようになり、砂糖を入れて嗜好品として飲む習慣もできて、16世紀には各地にコーヒーハウスができ、ヨーロッパに広まった。砂糖もイスラーム世界で開発された。

写真はカイロの伝統的なスーク、ハーンハリーリの入り口広場にあるコーヒーハウスとレストラン、上の階はホテルになっている。



3、「イスラームの基本的教義(2)

・キリスト教との対比(W. C. スミス(1919~2000)による)

 クルアーン.....イエス・キリスト(神の言葉として)

 ハディース.....聖書(創唱者の言行録として)

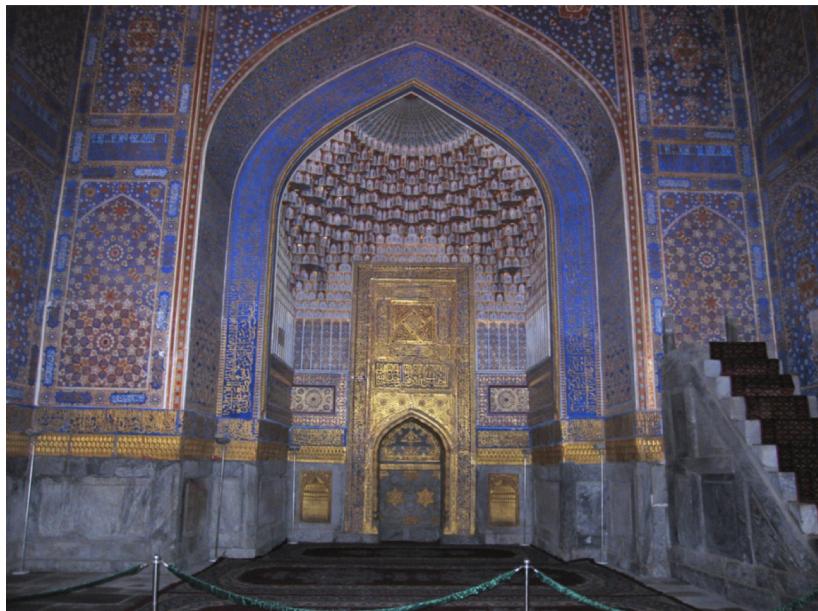
 ムハンマド.....パウロ(世界宗教へ導いた者として)

・イエスは神の靈から生まれた「神の言葉」、最高の預言者

・聖典はクルアーン、モーセの五書、ダビデの詩篇、イエスの福音書

・旧約の預言者を含めて25名の預言者を尊敬すること。

・近代までイスラーム支配下では、啓典の民(ユダヤ教徒、キリスト教徒)だけでなく、ヒンドゥー教徒なども保護民として信教・職業・移動の自由を認め、共存体制を築いた。特にオスマン帝国時代はミッレトという共存体制が機能。



4. イスラーム社会の特色(1)

・宗教的理念と政治的理念が一致することを理想とするが、政治権力と宗教権威の一致ではない。あくまでも理念上の思想。

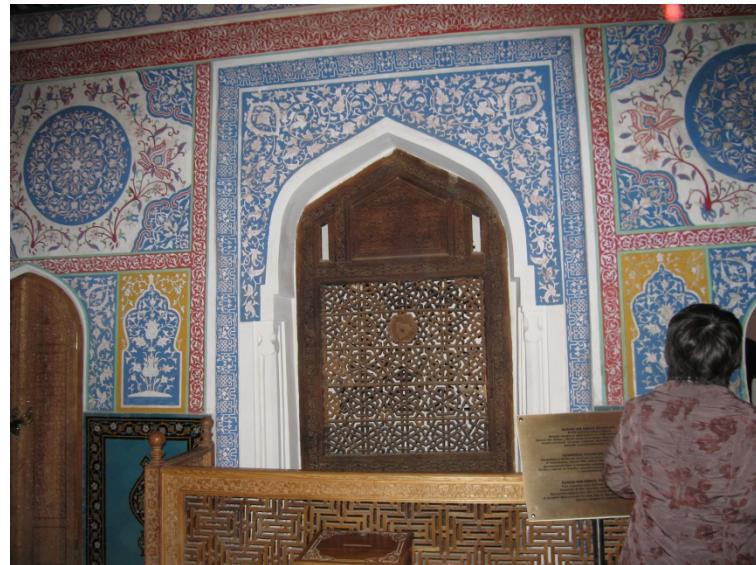
(宗教は社会の統一理念:どの宗教も社会や政治と関わっている。)

- ・在家の宗教:精神世界と世俗世界を区別しない。日常生活こそが信仰生活
- ・相互扶助が義務となっていて、長幼の序や弱者救済、礼儀作法が強調される。
- ・モスクは誰にでも開放されている。教区やメンバー制度は存在しない。
- ・礼拝では宗教的儀礼にはアラビア語を用いるが、個人的礼拝には母国語も。
- ・クルアーンは紛れもない「神の言葉」、ムハンマドは普通の人間、神格化されない。
- ・民間信仰としては、聖者崇敬も。聖者廟の参詣も盛んである。
- ・基本的教義さえ守れば、伝播した地域の文化・伝統を容認する柔軟な土着化も、驚異的な拡大の要因となった。



4. イスラーム社会の特色(2)

- ・教会制度や本山制度がなく、モスクの礼拝には、誰でも参加できる。
- ・宗派は、多数派のスンナ派と少数派のシア派に大別されるが、どちらも正統と認め合い、宗派の相違による宗教的な争いは、原則として発生しない。
- ・最後に判断をするのは神であるという立場から人間の側が、誰が異端で、反イスラームだと断罪することはできないので、異端審問や魔女裁判などは起こらない。
- ・今日、イラクやシリアで発生している内紛や対立は、宗教とは次元の異なる政治的覇権闘争や経済的利権争奪戦であり、「宗派対立」ではない。
- ・中東イスラーム世界は「いつも争っている」という印象があるが、今日の紛争は、近代以降の国際関係の中で、外部から大国が宗派対立を煽っているのが原因である。
- ・イスラームでは、大本山などがないために、信徒一人一人に決定権がある。宗教的な権威主義を否定して、世界中の信者が一つの共同体ウンマの構成員となる。



5、歴史上の相克と共存②

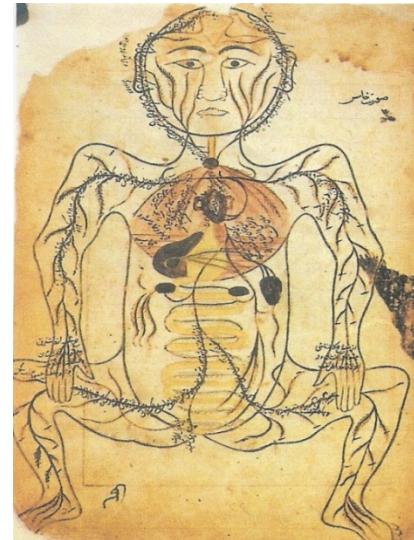
- ・ユダヤ教学院(イエシヴァ)の発展:当時のバグダードはユダヤ教の中心地
アッバース朝の資金援助により、現代のラビ・ユダヤ教の伝統が形成された。
- ・イスラーム軍がイベリア半島に進出(711)、後ウマイア朝(756)からナスル朝(1232～1492)まで約800年間、イスラーム支配下で融合文化が発展
- ・12～13世紀のトレドはアラビア語・ギリシア語文献をラテン語に翻訳する中心地
- ・ヨーロッパ中世の文化、科学の発展に寄与、スコラ哲学にも大きな影響を。
- ・パリ大学やオックスフォード大学でもイスラーム哲学が学ばれ、文化や習慣も伝わった。香辛料の使い方、フランス料理の食卓マナー、優雅な衣服、サロンの習慣、医学療法、美容や健康の知識、楽器の開発や音楽の発達、建築技法など。
- ・進んでいたイスラーム世界がなぜ後進地域となつたのか？世界史の主は交代する。



5、歴史上の相克と共存①

- ・イスラーム科学(アラビア科学)：近代科学の基礎となる世界史上の大融合文化
- ・進んでいたイスラーム世界と遅れていたヨーロッパ
「多神教時代の学問所」として、529年ギリシアのアカデメイヤが廃止される →
ギリシア科学の文献がイスラーム世界へ
- ・8世紀にアッバース朝のカリフによって建設された「知恵の館」で翻訳事業が展開
- ・医学、薬学、代数学、天文学、化学、哲学などの学問、音楽、料理、マナーなども。
アルコール、アルジェブラ、アルカリ、アサシン、キャンディ、コーフィー、コットン、
シュガー、シャーベット、ライス、ケミストリー：アラビア数字（インド起源）
- ・イブン・スィーナーの医学、フワーリズミーの代数学、イブン・ルシードの哲学…
- ・ユダヤ教徒・キリスト教徒との共同作業によって発展、アラビア語で著述。
- ・人体の血流、骨格、筋肉などの構造を世界で初めて解明した。

イブン・スィーナーの医学書は
ヨーロッパの医科大学で17世
紀まで入門書として使用された。
左図は、15世紀の医学書
で、血流を説明している。
右はウルグ・ベクの天文台跡
暦法の発達：太陽年(1年間)を
365日5時間49分15秒と観測し、今
の観測値より約25秒多かった。明
代の暦学に採用され、江戸時代に
日本にも伝えられた。



6. イスラーム文明の特色(1)

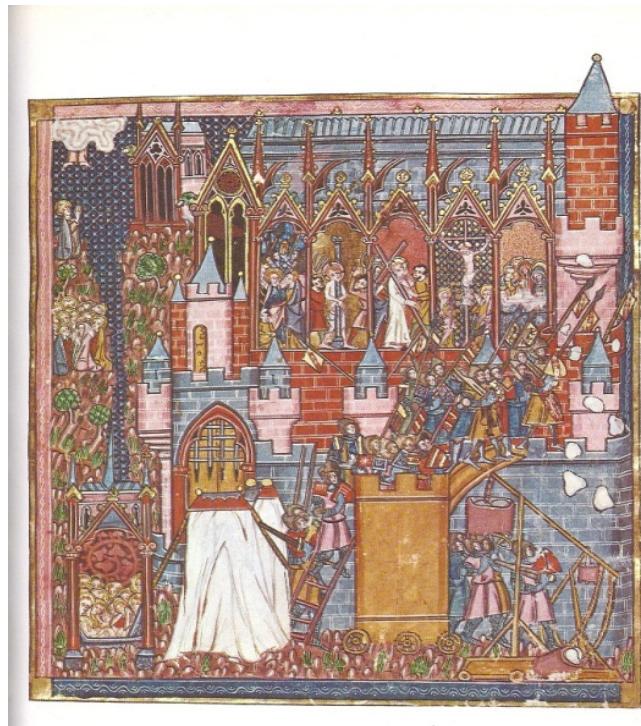
- ・「融合文明」: イスラーム文明は先行する諸文明、西アジアのメソポタミア、エジプト、ヘレニズムの各文明や、征服地の伝統文化、イスラーム信仰とイスラーム教徒の普遍的言語としてのアラビア語とが融合して成立した。
- ・「普遍的文明」: 世界宗教であるイスラームが民族や血縁、人種、社会階層などを超えた普遍性もつために、各地の地域的・民族的特徴を加えて、さらに普遍性をもった文明となった。
- ・「世界的な広がり」: アラビア半島に起こり、北アフリカ、西アジアに広がり、さらに周辺のヨーロッパや中国の文明にも大きな影響を与えた。現代の科学文明や生活文化の基礎となった。
- ・イスラーム文明は、文明活動に携わる人々がユダヤ教徒やキリスト教徒、ゾロアスター教徒、中にはインド人や中国人など、必ずしもイスラーム教徒ではない場合も多いが、イスラームの統治下で発展したために「イスラーム文明」と呼ばれ、またアラビア語を用いて著作・研究が行われたために「アラビア文明」とも呼ばれる。

イスラーム支配下では、アッバース朝(749～1258)以降、各地に展開した小王朝の時代であっても、統治者たちは、「科学アカデミー、学校、天文台、図書館」を設立して、学問を奨励した。特に国家は、小規模な国家であっても、安定的な政権であれば「科学政策」を重要視し、開明的な科学政策が実施されたために、輝かしい文明が発展した。人類や社会に利益となるものは何でも取り入れるという柔軟な態度。

7、宗教戦争とはなにか——領土紛争の大義名分

- ・十字軍遠征(1096～1270)：目的の大半は領土の侵略、財宝の略奪など、
第1次から第7次まで続く200年間、聖地エルサレムを奪還したのは、第1回十字軍によるエルサレム王国(1099～1187)を含めて合計100年間のみ。
- ・レコンキスタ(711～1492)：キリスト教国家による国土奪回運動
711年にウマイア朝がイベリア半島に遠征、756年から後ウマイア朝、最期のイスラーム王朝ナスル朝(1232-1492)まで。
- ・パレスティナ紛争(1948年～)ユダヤ教徒とイスラーム教徒の宗教戦争ではない。
1948年までは中東地域にはユダヤ教徒もキリスト教徒もムスリムも共存していた。
→今日の中東地域の混乱の第一の原因
- ・シオニズムとバルフォア宣言(1917年)
「民なき土地を土地なき民に」
パレスティナは無人の空き地だと認識されて、アラブ系住民の存在は無視された。
創世記15章18節「私(神)はあなたの子孫にこの地を与える。エジプトの川からユーフラテス川まで」

左はエルサレムを攻撃する十字軍を描いた絵画
14世紀、フランス



9. 現代のイスラーム (2) ムスリム女性の活躍

- ・ムハンマドの最初の妻は貿易会社の社長、彼は女性の意見を尊重
- ・クルアーンは女性の地位を認め、世界で初めて妻の遺産相続権を確立
 信仰上は男女差別はないと強調
- ・女性隔離、ヴェールの着用、長着は預言者の妻たちのステータスシンボル
 → 一般女性に広がる 本来はユダヤ教や地中海世界の習慣
- ・男女隔離政策を実施するサウジアラビアでは女性の世界で女性が労働
- ・時代や地域によって異なる対応があるが、女性の教育・就業は奨励
- ・世界的な宗教復興現象のなか、厳格な規定を求める勢力の存在も懸念



オマーンの宗務大臣夫人と
第一線で働く名家の娘さん



エジプトのカイロ大学の女子学生
イスラーム・ファッショントレンドをおしゃれを楽しむ

10. 佛教者の対話努力 峯岸正典師の場合

- ・佛教者としては珍しく、上智大学哲学科を卒業後、カトリック修道院で修行
- ・その経験から「東西靈性交流」の研究を目指す
- ・群馬県の曹洞宗長楽寺の住職を継承後、1985年「宗教間対話研究所」開設
- ・おもに東京グランドホテルを会場として、毎月、対話研究会を主宰
- ・研究会には、内外の宗教者・宗教研究者を招聘：人々が 佛教者だけでなく、新興宗教の信者、神道家、キリスト教徒、ムスリム、無神論者など、多方面から関心のある人が集まる。
 - ・その他の例：東京中野区の成願寺（小林貢人師）は、若手のイスラーム研究に対して奨学金を支給し、日本オマーン・クラブとともに日本・オマーン学生交流会の支援を行い、またアラブ学生に対して宿泊設備の提供等を行っている。



カトリックの神父たちが長楽寺を訪ねる



成願寺で座禅の体験をするアラブ人学生たち

11、差異を乗り越えること(1)

- ・パリのモスク：ナチスからユダヤ人を含む1732人（子供300人）を救ったムスリム
- ・エドワード・サイード（1935～2003）

西洋の非西洋（アジア、アフリカ、中東）に対する態度を蔑視的であるとして非難したオリエンタリズムで有名、中東紛争の解決に努力、

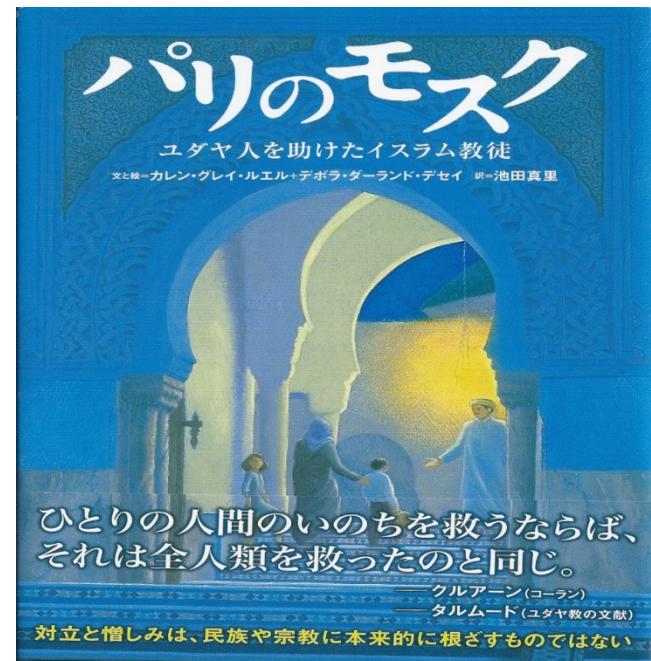
ウエスト・イースタン・ディヴァン楽団を結成、大江健三郎と交流

- ・ジョン・ヒック（1922～2012）イギリスの宗教学者、宗教多元主義を唱えた。

- ・ジョナサン・マゴネット（1942～）イギリスのユダヤ教進歩派ラビ

1972年からヨーロッパ・ユダヤ教・キリ

スト教、イスラーム対話協議会主宰、
レオ・ベック大学前学長



11、差異を乗り越えること(2)

- * クルアーンのテーマは「命を奪ってはならない」、聖書の教えと変わらない。
「人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである。」(クルアーン5:32)
- * 欧米のメディアによる短絡的な誹謗中傷は、相互理解を妨げる。
- * 日本はイスラーム諸国との間に歴史的軋轢を持たない。現在でもイスラーム諸国からは、世界中で最も尊敬される国である。(欧米を相手に戦争をした、敗戦後、驚異的に復活した、礼儀正しい、正直である、などの点で)
- * 日本人の多くは熱心な信仰を持つ人々を警戒する傾向があるが、近年、イスラームの行事も取り入れられつつある。(首相が主催するイフタールなど)
- * メディアによる歪曲されたイスラーム観や、政治的紛争に関する一方的な判断を避けて、個々人として話し合うことが重要である。



「イスラーム理解と平和的共存」に関する参考資料(出版年順)

塩尻の著作・共著

- ・共訳『聖戦の歴史』アームストロング著、塩尻・池田訳、柏書房、2001年
- ・共著『イスラームの生活を知る事典』塩尻・池田著、東京堂出版、2004年
- ・単著『イスラームを学ぼう—実りある宗教間対話のために—』秋山書店、2007年
- ・単著『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会、2008年
- ・監修・共著『図解宗教史』塩尻・津城・吉水監修、成美堂出版、2008年
- ・単著『イスラームを学ぶ』(NHKカルチャーラジオ歴史再発見) NHK出版、2015年
- ・編著『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』(明石書店) 2016年
- ・共著『宗教と対話』小原克博・勝又悦子編、教文館、2017年

その他の研究者の著書

- ・『地中海世界のイスラム』モンゴメリ・ワット著、筑摩書房、1984年
- ・『イスラーム誤認』板垣雄三、岩波書店、2003年
- ・『イスラムと十字軍』(文明の道4) NHK出版、2004年
- ・『イスラーム化する世界』大川玲子著、平凡社、2013年
- ・『イスラームの深層』鎌田繁著、NHK出版、2015年
- ・『「イスラム国」はテロの元凶ではない』川上泰徳著、集英社新書、2016年
- ・『イスラーム主義』末近浩太著、岩波新書、2018年
- ・『9.11後の現代史』酒井啓子著、講談社現代新書、2018年

写真説明

1、(2)イスラーム世界では、男性の目にあまり触れないが、女性の社会進出も目覚ましい。右はチュニジアの女子高生、左はウズベキスタンのイスラーム大学の女子大生たち。ウズベキスタンではまだベール姿は少ないが、イスラーム大学の女子大生が被っていた。トルコでもチュニジアでもベール着用は増えてきた。

2、右の写真はシナイ半島、真ん中のオアシスにギリシア正教のセント・カテリーナ修道院があり、その境内に、モーセの「燃える柴」や「井戸」の遺跡がある。奥の山はモーセが十戒を授かったといわれる山で標高2300メートル。

左はエルサレムの全景、右に光るドームがイスラームの「岩のドーム」、この中にアブラハムがイサクを犠牲に捧げようとした岩と言われる巨岩がある。ここはユダヤ教徒にとっては神聖な「神殿の丘」。

3、(1)写真は、マッカ(メッカ)の巡礼風景、右奥に小さく見える黒い箱のようなものがカーバ聖殿(内部には何もない)。義務の大巡礼はイスラーム歴12月7日から10日までに世界中で300万人以上、詰めかけ、ほぼ同時に同じ儀礼をおこなう。義務の巡礼を済ませた人は「ハッジュ(女性はハッジヤ)」という敬称がつく。

3、(2)右はチュニジア、カイラワーンのグランド・モスク、内部は付近のローマ遺跡からとってきた古代の柱や石がそのまま再利用されている。左はウズベキスタンのウルグ・ベクの学問所の礼拝の方角を示すミフラーブ。美しいタイル画で装飾されている。

4、(1)左はマディーナ(メディナ)の預言者モスク、生前のムハンマドの住居跡に作られたモスクで、この中にムハンマドの廟がある。右はムハンマドの廟、クルアーン第49章3節が刻まれている。左右に第1代カリフと第2代カリフが同じ形で葬られている。

4、(2)はカイロにあるアズハル・モスクの入り口、970年にできたスンナ派最高の学問所、世界初の大学ともいわれる。現在は総合大学となつたが、ムスリムでなければ入学できない。左はサマルカンドにあるシャーヒ・ズィンダ聖者廟、この格子戸の内側に埋葬されている聖者は、今でも墓の中で生きていると信じられている。

5、(2):右はスペインのアルハンブラ宮殿の遠景、左はシリアのウマイア・モスク。ウマイア朝の初期に、ビザンチンの聖ヨハネ修道院を改築、ビザンチン様式の建築物や装飾が見られる。境内の奥に洗礼者ヨハネの首塚があるが、建物は最近の内戦で被害を受けていることも危惧される。

9、(1):右は最近明らかにされた話で、フランスがナチス・ドイツに占領されていた際に、パリの大モスクで1732人を超える多くのレジスタンス闘士やユダヤ教徒(そのうち、子供は約400人)たちがムスリムによってナチスの手から救われた実話が『パリのモスク』という童話にして出版された。救出劇は極秘に行われたために、戦後も秘密は守られ、最近まで明らかにならなかつた。

左は『オリエンタリズム』で有名なエドワード・サイード(キリスト教徒)が創設したパレスティナ人とイスラエル人の混成オーケストラ「イーストウェスト・ディーワーン楽団」の演奏風景、指揮者のダニエル・バレンボイムはユダヤ人。日本にも数回やってきた。

11、(3):塩尻が最近参加した宗教間対話会議、左は2017年5月20日の第8回イバーディ会議(東京大学)で開会式の基調講演を依頼された。右は2014年11月12日にウィーンのKAICIID会議(サウジアラビア前国王が主催)で最終日の基調講演を依頼された際の写真。